

第1回看護研究会

(新任看護師・職員教育研修会)

- 日時 平成30年6月8日(金) 10時~16時
- 会場 岡山県医師会館 三木記念ホール
- 出席者 55病院271名・委員12名

講演

ハートフルな仕事とは

～ホスピタリティ・マインドで

プロフェッショナルを目指す～



講師
 (株)タンタビーバ
 共同創業者／元気の種まき担当
 板谷 和代 氏

まず、なぜ「働くこと」を選択したのかという問いかけがあった。そして、講師自身が人事異動で望まない部署へ配置となった時、なぜ働くのか、自分はこれからどうしたいのかと考えた。問題を自分のこととして捉えることで、自分で解決策を決めることができる。そしてそれが自分の可能性を拡げる。人間は「自らの心」を高めるために働くと考えている。

次に、「ハートフル(心があつたか)な仕事」について話があった。ハートフルな仕事に欠かせないのは相手への思いやり、心、つまりマナーが欠かせない。「思い」は目に見えないが、マナーにすると相手に見える。まずは相手を思うこと。そして相手に確実に伝える手段としてマナーは大切な役割を果たす。マナーの基

本である「身だしなみ」「挨拶・お辞儀」「態度・表情」「言葉遣い」でどのような形にして伝えるか具体的な話があった。また、時間管理・健康管理も職場での大切なマナーであり、病院外での振る舞いや業務上の情報管理も社会人として大切なマナーである。

講演

「いのち・くらし・尊敬を

まもり、支える看護への道



講師
 川崎医科大学総合医療センター
 山田 佐登美 看護部付参事

講演の演題である「個を生かす」とは自分自身の強みを活かすということ、「輪を拡げる」とはチーム・組織をつくるということ、一つひとつの経験を通して、少しずつ自分がなりたい看護師になっていくということを受講者に伝えられた。

看護師は、いわば「チーム医療のキーパーソン」として患者や医師、その他の医療スタッフから寄せられる期待は大きい。現在、看護師が置かれている

うという気持ち、そして行動」と定義し、一人ひとりが自分の強みを磨いて活躍し、毎日笑顔でいる。そして自分と違う他人に感謝することにより自己効力を高め、一歩前へというモチベーションのスイッチをオンにする。一人ひとりがスイッチオンになると組織に勢いが出て、組織効力感が高まる。

看護師という仕事を選択した理由に立ち返り、ホスピタリティ・マインドを發揮し、モチベーションを持つことが大切である。(看護研究委員 小幡陽子)

社会的状況を、地域包括ケアシステムやチーム医療のあり方を通して説明された。

在宅シフトが進んでいく中、看護師がリーダーシップを遺憾なく發揮するために、①患者を生活者として捉える視点 ②患者の自立／自律を尊重するケア ③患者の意思決定支援が必要とされる。人が集まっただけではチームにならない。互いが、互いの役割を十分遂行できるように助け合い、自分はそのための何ができるかという当事者意識を持つ。自分は期待され、必要と感ぜられる自負心と我々という意識を持つ。一人ひとり違うことに感謝し、人から取り入れ、自分の能力を高めることが重要である。
 いのち・くらし・尊敬をまもり、支える看護実践として、看護の仕事に関

する正しい認識を持つことが必要である。病院では、日常の一部として人が苦しみ、死ぬという尋常ではないことが起こる。専門職と言われる職業は、本質的に一般社会の行動様式からある程度逸脱することが許されている。非日常性に対して感情が動かなくなり、ルーチン化され、「患者が物として扱われていないか」という普通の感覚がとても重要となる。排泄ケアや患者の意思決定などの事例が紹介された。

自分になりたい看護師になるためには、レジリエンス(再起/回復力、復元力)を高め、危機や難局を乗り越える力、失敗を恐れて行動回避する癖を見直し、目標に向かって前に進むことのできる力を蓄えることが大切である。そのためには、①ネガティブ感情の悪循環から脱出する ②役に立たない「思い込み」をてなすける ③「やればできる」という自信を科学的に身につける ④自分の「強み」を活かす ⑤こころの支えとなる「サポーター」をつくる ⑥「感謝」のポジティブ感情を高める ⑦痛い経験から意味を学ぶなど7つの技術がある。

過去は変えられないが、明日や未来は誰しも変えることができる。科学技術が進化しても看護という仕事は「人間でしかできない能力」を發揮することができ、職業として続いていく、と締めくくられた。

(看護研究委員 池田 悦子)